

Title	レンネル島文化の起源と孤立性
Sub Title	On the origin of the Rennellese culture and its isolation
Author	近森, 正(Chikamori, Masashi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1986
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.55, No.2/3 (1986. 1) ,p.105(219)- 116(230)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19860100-0105

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

レンネル島文化の起源と孤立性

近 森 正

I ポリネシア・アウトライアー

——今から二三世代の昔、ウベア・ubea に住んでいたカイトゥは二柱の神がムガバ (Mugaba) 大きな Mu レンネル島のこと) を手に入れたいと、ぞんでおられるのを夢で知った。彼はさっそく二柱の神の化身である大きな石を双胴のカヌーに乗せ、母と母方のオジをともなつて船出した。彼らのカヌーはフトゥナ、ヘヌアタイなど、いくつもの島に立寄った。途中、トンガゲバの神に捕えられそうになったが、やつのことでムガバの北東端にあるアハンガ Ahanga に到着した。カイトゥはその大きな島にウベアの名をつけた祭祀場 (ngaguenga) マガマ・ウベア (Magama'ubea) を建設した。——

島民の語る伝承は、みずからの来源を「ウベア」に求める。ウベアとはどこか。

この渡来伝承にもとずいて言語学の S. Elbert (1967)

は、フィジー諸島の北東、サモア諸島の西にある東ウベア East Uvea (ウォリス Wallis 島) の可能性を検討する。プロト(原)・ポリネシア語の音素 /ʔ/, /h/, /r/ を比較し、二〇〇の基礎語彙を分析した結果、レンネル語はあきらかに、プロト・核ポリネシア語から分岐したものであるが、東ウベア語との関係は否定的である。レンネル語はいくつかの声門閉鎖音をもってはいるが、むしろフトゥナ(東フトゥナ) 語あるいはティコピア島の言語との間に、最も近縁性のあることを見出したのである。

東ウベアはかつてトンガ人の侵入をうけたことがあるから、もし、伝承が語る「ウベア」を東ウベアに求めるならば、すくなくともそれ以前での関係を考えなければならぬ。いだらうと Elbert は述べている。この議論の重要な論点は、プロト・東ポリネシア語や、プロト・サモア語と並んでプロト・核ポリネシア語を構成する同じレベルに、プロト・フトゥナ語を置き、そのひとつにレンネル語を組み入

れたことである。

ところで、レンネル島の住民がポリネシア語をあやつることは早くから知られていた。一八五六年、おそらく白人として最初にこの島を訪れた、英国国教会の主教 Bishop Patterson は、自分のマオリ語の知識が島民との会話に役立ち、あいさつをする時に互に鼻をこすり合わせる風習をはじめ、レンネルの住民がメラネシアにありながら、まったくポリネシア人であることに驚きをあらわしている。(J. Gutch 1971)

実際、ポリネシア人のひろがりの不思議な様相のひとつはミクロネシアとメラネシアの東の端の小さなサンゴ礁にポリネシア人が居住していることである。このようにハワイとニュージランド、イースター島をそれぞれ頂点とするいわゆるポリネシア三角形の外側に、散ばるように居住するポリネシア人の集団を、P. Buck (1938) は「ポリネシア・アウトライアー」と呼んだのである。

その分布は北緯三度から南緯二一度までの広大な海域にひろがっている。すなわち、ミクロネシアのカロリン諸島の南に位置するヌクオロ環礁を最北として、そこから南へ下ってカピングアランギ、ヌクリア、タクウ、ヌクマヌ、ルアンギウア(オントン・ジャワ)、シカイアナなどの環礁、さらに東南方向にのびてサンタクルーズ諸島のピレニ、タ

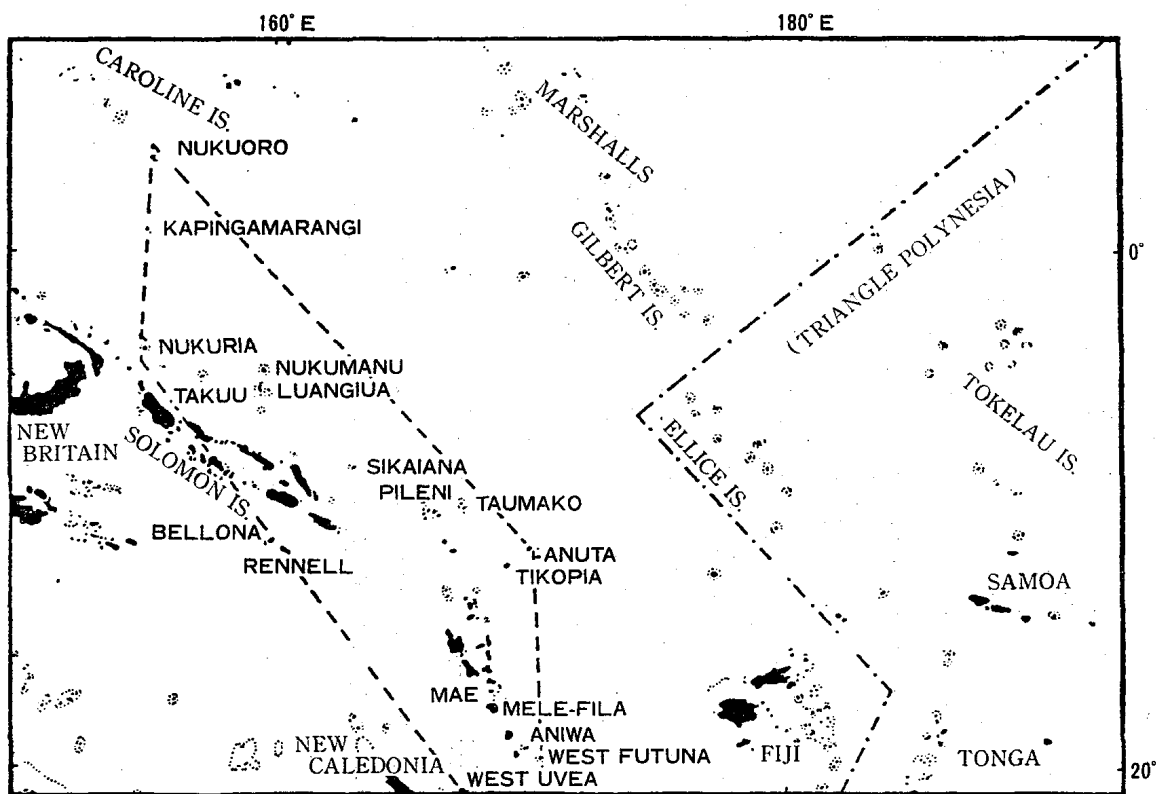


fig. 1. ポリネシア・アウトライアー

ウマコ、アヌタ、ティコピアなどの島々。そしてニューヘブリデス諸島に入り、マエ、メレーフィラ、アニワ、西フトゥナにいたり、最も南にはローヤルティ諸島に属する西ウベアがある。レンネル島とベロナ島はその大きなS字状の分布からはずれて、ソロモン諸島の南側に孤立している。(Fig. 1)

これら一八の島のうち三分の二が環礁や隆起環礁などのサンゴ礁で、すべて小さな島ばかりである。これらの島に住む人々は基本的にポリネシア語を用い、ある程度ポリネシア型の社会組織をもっている。

これらのポリネシア人は、一体どうしてメラネシアの海域を中心に孤立して住みついたのだろうか。従来、ポリネシア・アウトライアーの起源については、二つの対立する考え方があった。ひとつは西から東方へ移動した古いポリネシア人の痕跡とするいわゆる「残存説」であり、もうひとつは、ポリネシア文化圏が成立してから、西へ植民した新しいポリネシア人の集団であるとする、「もどり波説」である。

Churchill (1911) はハワイ、ニュージーランド、イースター島をそれぞれ頂点とするいわゆるポリネシア文化圏の三角形が成立する以前に、ポリネシア人がメラネシアからミクロネシアを通過して移動したと考え、アウトライアー

レンネル島文化の起源と孤立性

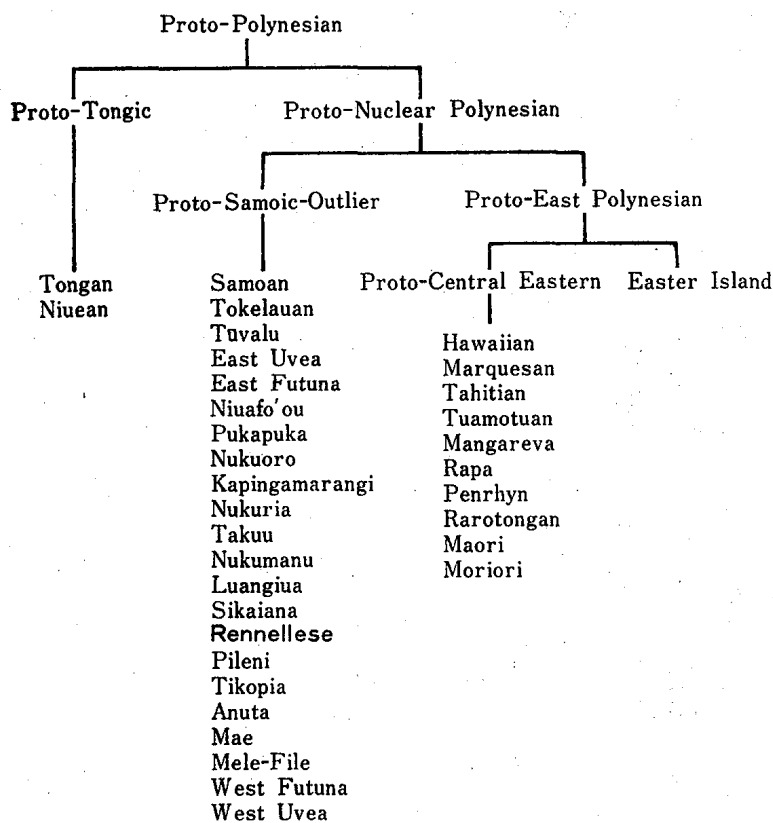


fig. 2. Pawley (1966) によるポリネシア語の分類

はその移動の際にとり残された痕跡であると考えた。この見解はその後 Capell (1962) によって再び主張され、アウトライアー諸語にポリネシア語の古い形 (archaic form) をみとめようとしたのである。しかし、今日では、ほとんどの研究者はアウトライアーの定着が、ポリネシア文化圏の確立後、そこから西へもどるようにして拡散した結果であるとみなしている。そして、それらはエリス諸島からト

ンガ諸島にかけて、ポリネシア三角形の西側に形成されたポリネシアの最も古い副領域、いわゆる西ポリネシアに起源地をもつという見方が一般的である。(Elbert 1953; Green 1966, Pawley 1966, 1967)

いわゆる西ポリネシアの地域で形成されたプロト・ポリネシア語は、最初にトンガ語の祖先が分離⁽¹⁾し、そして、すべてのポリネシア語の祖語になるプロト・核ポリネシア語が成立した。Pawley (1966) は、語彙とともに形態論的・音韻学的観点から、彼のがげる一二のアウトライアーのすべてを、プロト・核ポリネシア語からさらに分岐したプロト・サモア語に属するものとしている。(Fig. 2)

これによって Pawley は、アウトライアーを三つのグループにわけた。

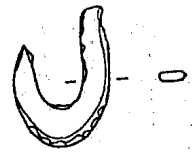
- (a) カピンガマランギとヌクオロのミクロネシア・グループ。(北部グループ)
 - (b) シカイアナ、ルアンギウア(オントン・ジャワ)、ヌクマヌ、タクウ、ヌクリアなどのソロモン諸島の北側に位置するグループ。(北部グループ2)
 - (c) メレーフィラ、西フトゥナ、アニワなどのニューヘブリデス諸島グループ。(南部グループ)
- そして、このうち(a)と(b)はエリス諸島の言語と、(c)は東フトゥナの言語とそれぞれ発生的関係にあることを指摘し

た。ただその中で彼はレンネル語をとりあつかっていないかったが、のちにGreen (1971) によって、それが(c)グループに加えられたのである。

この見解はアウトライアーの二〇〇の基本語彙と二二の親族名称、五八の技術名称を比較、分析した D. Bayard (1976) の総合的な研究の結果ともほぼ一致している。すなわち Bayard はアウトライアーの可能な起源地として、トンガ、サモア、東フトゥナ、東ウベア、エリス、トケラウ諸島を検討し、北部のグループはエリス諸島。南部のグループの大部分は直接的ではないにしても東フトゥナとの関係が強いことを指摘したのである。⁽³⁾

こうしてみると、現在の研究段階では、Elbert, Pawley, Bayard らの示唆するようにレンネル語の起源地として、東フトゥナが最も可能性が高いといわなければならないだろう。

これに対して考古学的事実は何を語るか。私達がレンネル島において発掘調査した先史遺跡において、最も古い文化層(紀元前一四〇年)を代表する遺物は貝製の釣針である。材料、形態、大きさなどによって、四型式にわかれる。第一型式はリュウテンサザエを用いたU字形の単式釣針。第二型式はシンジュガイ製で、これはトローリング用の組合せ釣針である可能性もある。第三型式と第四型式は



a, b 第一型式
リュウテンサザエ製
c 第三型式
サラサバテイガイ製

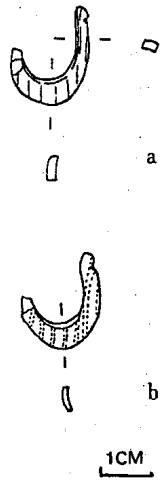


fig. 3. レンネル島先史時代の貝製単式釣針

サラサバテイガイ製の底部を用いる強度の大きいもので、軸部の先端に糸をしぼるノッチが設けられている。

これらのうち、第一型式と第三、四型式はティコピア島とアナタ島の先史遺跡において、ほぼ同年代の文化層から出土しており、第二型式はティコピア島で発見されている。貝製の釣針は、かならずしも西ポリネシアで発達したとはいえないが、それらと比較すべきものはトンガタプ島、ニアトプタプ島などで、ラピタ土器をとまなう文化層からその存在が知られている。ペロナ島では無文のラピタ式類同の土器が発見されているが、レンネルの初期文化層にみられる遺物組成は、ラピタ文化の様相をよく示しているといえる。ポリネシア・アウトライアーの考古学的研究

レンネル島文化の起源と孤立性

がまだ充分におこなわれていないために、文化系統を議論するだけの資料がそろっていないが、レンネルの初期文化は西ポリネシアを中心とする比較的後期のラピタ文化に属するものと考えられるのである。

II 孤立性

ところで、アウトライアーの起源について最も早く論じたのは Thilenius (1902) である。彼はその論考の中で、アウトライアーの島々がメラネシアの主要な島嶼群の風上側に位置していることに注目しているが、このことはアウトライアーのカヌー航行による到達可能性を推測するときに示唆に富む。

アウトライアーの定着については、現在もつとも有力な根拠を与えてくれるのは、Levinson ら (1973) のおこなったポリネシア海域の綿密なコンピュータ・シミュレーションの結果である。対象にされた地域は、東経一五〇度からアメリカ大陸沿岸にいたり、北緯三五度から南緯五〇度にわたる範囲である。この範囲の中を彼らはさらに緯度と経度五度のグリッドに区劃し、その各グリッドから気象資料を集めた。風向、風速、潮流などの観測値は、年間平均値や卓越的な値ではなく、月ごと、日ごとのデータが用いられた。そしてそれらのコース、速度、視界範囲、生存可能

性などが考慮されてシュミレーション・プログラムが組み立てられた。各島は海岸の長さ、島の規模、標高などにしたがって上陸半径あるいは上陸円形が示される。一日あたりの航海距離は風と表層海流の速度との関連でとらえられ、航海の持続は二六週間を最大航海時間、ただしその五〇%以内は一〇週間以内とされた。(Table 1)

ポリネシア・アウトライアーについては、それらの起源地として可能性のある次の五つのグループ一五地点がとりあげられた。

- (1) トンガタブ、アタ、ニウエ、フォヌアレイ、オノ・イ・ラウ——トンガ・グループ
- (2) 東ウベア、東フトウナ、ロトウマ——ウォリス・グループ
- (3) ナヌメア、ニウラキタ——エリス・グループ
- (4) ファカオフォ——トケラウ・グループ
- (5) サヴァイ、ローズ——サモア・グループ

ひとつの出発地点からの航海は、一年三六六日の毎日二回を設定し、七三二回のシュミレートが標準とされた。風向の季節移動、海流、その他さまざまな条件を組み入れて、数多くの実験がくりかえされた。

その結果は、すべての出発地点から、三四九〇回がフィジーをのぞくメラネシア地域に到達してゐる。そのうち

の一、六四三回(四七%)がポリネシア・アウトライアーの島である。そのほか六九回(二%)がエファテとタナ、一八〇回(五%)がファタカ(アヌタの近くの島でアヌタ島民が居住する)、三三七回(一〇%)がポリネシア文化の要素をもつメラネシア人の居住する島、そして残り二六一回(三六%)がポリネシアとの接触を示す証拠をもたない島であった。かなりのポリネシア人の漂流がアウトライアーのスクリーンを通り抜けて、メラネシアの大きな島に到達し、そこに住む住民に吸収されてしまった場合があった⁽⁴⁾だろう。それにしても五四%がアウトライアーあるいはアウトライアーの近隣の島に到達していることは注目すべきである。

この結果をみると(Table 2)アウトライアーは、定着可能性の占める割合によって、あきらかに四つのグループにわかれる。第一はエリス諸島からの定着の可能性の最も高いヌクオロ、カピングランギ、ヌクリア、ヌクマヌ、ルアンギウア(オントン・ジャワ)のグループ。第二はエリス諸島と東フトウナおよび東ウベア(ウォリス)からの可能性が大きいタクウ、シカイアナ、タウマコのグループ。第三は東フトウナおよび東ウベア(ウォリス)島からの可能性を示すピレニ、ティコピア、アヌタ、エマエのグループ。第四はトンガ諸島から漂着可能性のあるメレーフィ

Table 1. 西ポリネシアとポリネシア・アウトライアーの
接触可能性 (Levinson et al. 1972)

Destination	From Ellice Islands	From Futuna (Hoorn) and Wallis (Uvea)	From Samoa	From Tonga
Northwest Outliers.....	1.4%	0.5%	0.2%	0.0%
Kapingamarangi	0.9	0.4	0.0	0.0
Nukuoro	0.5	0.1	0.2	0.0
Central Outliers	16.8	10.7	4.5	0.1
Ontong Java	10.7	5.7	2.8	0.1
Nukumanu	4.6	3.2	1.1	0.0
Sikaiana	1.0	1.3	0.5	0.0
Ta'uu	0.2	0.4	0.1	0.0
Nukuria	0.1	0.1	0.0	0.0
Santa Cruz Outliers	5.2	5.4	0.7	0.4
Duff Islands	3.1	2.5	0.4	0.0
Reef Islands	0.6	1.1	0.2	0.1
Tikopia	0.7	1.0	0.1	0.2
Anuta	0.8	0.8	0.0	0.1
New Hebrides Outliers...	0.1	0.2	0.1	4.2
Emae	0.0	0.0	0.0	0.0
Efate	0.1	0.2	0.1	1.6
W. Futuna	0.0	0.0	0.0	2.0
Aniwa	0.0	0.0	0.0	0.6
W. Uvea (Loyalty Islands)	0.0	0.0	0.0	0.1
Rennell & Bellona	0.1	0.0	0.0	0.0
Total	23.4	16.8	5.5	4.8

レンネル島文化の起源と孤立

ラ、アニワ、西フトゥナ、西ウベアのグループである。これらは、たしかにすでにのべた Pawley (1967) や Green (1971) の言語学的関係とよく対応している。

ところでこの結果は、東フトゥナおよび東ウベアから、ピレニの南側のアウトライアーに対して漂流航海による到達の可能性がかなり低い(三・一%)という見通しもまた与えている。その可能性はエリス諸島からの航海による居住に比べてわずかに高い(二・三%)にすぎない。トンガ諸島からの可能性は全体に低く(四・八%)。それらはほとんど南方アウトライアーに限られている。エスピリトゥ・サントとサンクリストバルの間の通過は、風と表面海流が北寄りになるとトンガ諸島からの航行

がむづかしくなり、エリス諸島からの航行の多くはサンタクルズ諸島で仕切られてしまう。

したがって、レンネル島に対する西ポリネシアからの居住の可能性はきわめて低いといわなければならない。そのプロバビリティは、ルアンギウア（オントン・ジャワ）についてエリス諸島から一〇・七%が見込まれるのに比べて、レンネル島については、わずか〇・一%しかない。しかも他の起源地との可能性は全くゼロである。つまりレンネル島について直接、ポリネシアからの到達の可能性がほとんどないということになる。むしろ、これはモデルの枠組の中で解釈されることであるが、レンネルが、西ポリネシアとの接触の機会に乏しく、文化的に孤立を保ってきたことは、考古学的あるいは民族誌的証拠からみても、充分に予想されるところである。

Wardらはティコピアからの二次的居住、つまり新たにティコピアを出発地とする七三二回の航行についてもシュミレーションを重ねているが、これによるとティコピアからレンネルへの上陸の機会は一四回、すなわち〇・五五%の可能性を生ずる。このことからレンネルへの居住が直接、ポリネシア地域からではなく、他のアウトライアー社会からの二次的な移動によってなされた可能性も考えなければならぬ⁵⁾。しかし、Birker-Smith (1956)はレンネル島民

とティコピアの接触はあったとしても、比較的最近のことにはすぎないとし、早い時期にポリネシアの枝 (Polynesian stock) から由来したレンネル島民は他のポリネシア人集団とはほとんど接触をもつことがなかったと述べている。

ところでレンネルの島民が長期にわたって孤立を保ってきた可能性は、いくつかの証拠によって指摘することができる。われわれの調査において、形質人類学の小片丘彦は、人種によってそれを欠く頻度が異なるという手首の長掌筋 *palmaris longus muscle* と足の第三腓骨筋 *fibularis tertius muscle* について、男二八〇人、女性二五〇人の島民を調査した。その結果によると、長掌筋の出現頻度がごく平均的なあらわれかたをしているのに比べて、レンネル島民の第三腓骨筋を欠く頻度が、今までに報告された世界中のどの民族よりも、いちじるしく高い。(Table 2) (Ogata, 1975 in ed. Chikamori 1975)

また、レンネル島民の血液型集団と遺伝子頻度を調査した Simmons ら (1966) は、島民一七五人について、A B O式血液型において、Bの頻度が〇・三四、〇・三五に對し、Aは〇・〇一しかあらわれないことを指摘している。これはポリネシア人の一般とは著しく異なっており、太平洋のすべてに見られない傾向である。さらにMNS式血液型においても、Mについて〇・七〇、〇・六九の割合

Table 2. 長掌筋と第三腓骨筋の欠如頻度 (小片 1975)

a. Frequencies of Absence of Palmaris Longus Muscle in Rennell Islanders with Comparative Data from Other Previous Publications

Population	Number of arms	Percentage of absence	Author
Chinese	630	2.7	Wagenseil (1933 & 36)
Japanese	1,066	4.1	Suzuki (1955)
Indonesian Males	200	4.5	Chippaux et al. (1950)
Samoans	458	4.6	Suzuki (1963)
American Negroes	636	4.7	Thompson et al. (1921)
Rennell Islanders	1,059	7.0	Ogata (1975)
Russians	2,854	17.8	Polonskaja (1937)
Poles	2,000	18.7	Zebrowski (1934)
American Indians	202	19.3	Thompson et al. (1921)
American Whites	2,402	19.7	Thompson et al. (1921)
Portuguese	1,400	21.1	Esprequeira Mendes (1926)

b. Frequencies of Absence of Fibularis Tertius Muscle in Rennell Islanders with Comparative Data from Other Previous Publications

Population	Number of legs	Percentage of absence	Author
Papuans	28	0	Negel (1925)
Chinese	100	0	Ryu (1932)
Japanese	938	4.5	Adachi (1909)
Japanese	204	5.4	Shigematsu et al. (1956)
French	240	5.8	Le Double (1897)
English	204	6.9	Wood (1867-68)
Poles	1,814	7.1	Posmikiewicz (1934)
Negroes	114	9.8	Loth (1931)
Japanese	970	9.9	Morimoto et. (1959)
Chinese	84	10.2	Nakano (1923)
American Indians	608	14.3	Spuhler (1950)
Negroes	124	15.3	Vallois (1926)
Berbers	106	23.6	Leblanc et al. (1931)
Rennell Islanders	1,060	27.0	Ogata (1975)

を示すのに対してSが出現しない。彼らがポリネシア人由来とするならば、この変則的なかたよりは最大限のドリフト効果があらわされたものとみななければならぬだろう。このような事実は最初にレンネル島に移住してきた集団が、人口規模の小さいもので、長期的に隔離されていたために遺伝的浮動が働いた結果であることを物語る。これは集団遺伝学において、創始者効果 *founder principle* と呼ばれる原理であるが、これによってレンネル島民が長い間孤立してきたことを推測することができる。⁽⁷⁾

註

(1) プロト・トンガ語はトンガ語とニウエ語だけを含むサブグループであって、それは明瞭にサモア語と区別される。例えば数詞の九 *hiva* が、トンガやニウエ語では *hiva* であるのに対し、サモア語では *iiva*、マオリ語では *iwa* となる。プロト・ポリネシア語の *ʔ* が、トンガ語ではよく保存されている。

(2) ポリネシア語の言語統計学的な研究は、Dyen (1965) によって最も包括的におこなわれた。彼は Pawley が早レベルで分離させたサモア語とトンガ語を共に同じレベルで西ポリネシア語のクラスターに入れ、さらにそのレベルにレンネル語も位置づけた。しかし、Dyen の分類は、あくまで統計論理上の表現であって、例えばアウトライアーのカピンガマランギとヌクオロの言語に西ポリネシア諸語や東ポリネシ

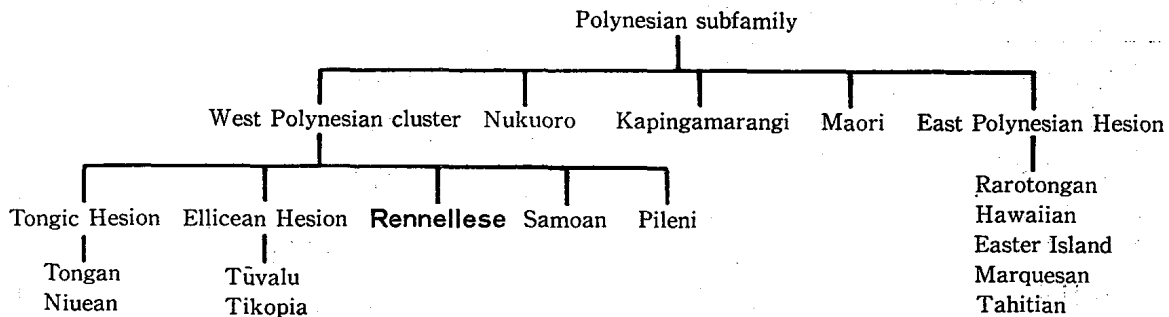


fig. 4 Dyen (1965) によるポリネシア語の分類

ア諸語、マオリ語などと並ぶ独立した地位を与えるなど、歴史的な解釈としては支持されるものではない。(Fig. 4)

(3) アウトライアーの故地として、エリス諸島を重視したのは Howells (1973) である。彼はサモアからエリスをへて、西へ移動したポリネシア人がアウトライアーの祖先であるとし、その年代は西ポリネシアから東ポリネシアに移動があった時期、すなわち紀元一世紀をさかのぼることはないだろうとしている。この年代観は、東部メラネシアにおいて、プロト・ポリネシア文化をつくりだした初期ラピタ土器の荷ない手との関係を否定する。

(4) あきらかにポリネシア的要素をもたないメラネシア人の島への到達が含まれるが、これは現実にもあり得たと考えられる。ポリネシア人が到達し、定着する可能性は、その島の規模と先住民の人口

規模に依存するものであったろう。すなわち、島が大きく、人口規模も大きければ、到来したポリネシア人とその文化は吸収されてしまい、定着の可能性は少ないと考えられる。

(Vayda 1959)

- (5) Pilot Chart によれば、レンネル島周辺の潮流は東からの流れで、とくに真東あるいは北東で 1-2 ノットである。南東と南は少なく、南西と西からくる潮流は年間を通じて記録されていない。したがってティコピアとの関係はすでに Firth によって事例が報告されているように予想されることである。(Firth 1931) ティコピアでは、レンネルが *Mukava* として知られていたと *Woodford (1907)* は、*McKai* アナ島 (アウトライアー) の伝承に *fenuahula* と呼ばれる女護ケ島があり、砂浜のない島として語られているから、それがレンネルではないかと記している。

- (6) 生物が移住する場合に集団サイズが一時的に縮小することが起る。それを瓶首効果 *bottle neck effect* と云うが、それがその後の集団の遺伝子構成に遺伝的浮動をもたらす。移住した個体数 (創始者) が小さく、隔離された新しい環境において、コロニーは必ずしも母集団の遺伝子構成を反映し得ないからである。

- (7) レンネルの孤立性はヨーロッパ人にこの島が知られるようになってからも、久しく続いた。一八五六年七月に Bishop Selwyn と Patterson がこの島を訪ねたのが最初の記録である。その後、オーストラリアからソロモン諸島に向う汽船

レンネル島文化の起源と孤立性

がレンネル島を目標にして航行していたことは事実であるが一九〇七年にその航路は中止された。レンネルがヨーロッパ人の渡島を拒んできたのは、そこに投錨できる地形を欠いていたからだけではなく、不毛で、水を得られないことなどによるのではないだろうか。そのために交易ステーションの設立もみなかったのだろう。そして、一八九八年にソロモン諸島のひとつとして、英国保護領となつてからは、島に上陸するには政府の許可を必要とするようになった。

文献

- Bayard, D. 1976 "The Cultural Relationships of the Polynesian Outliers" *Otago University Studies in Prehistoric Anthropology* 9
- Birket-Smith, Kaj. 1956 "An Ethnological Sketch of Rennell Island" *Det Kongelige Danske Videnskaberne Historisk-filogiske Meddelelser*, bind 35, nr. 3
- Buck, P. 1938 (1959) "Vikings of the Pacific" (First published as *Viking of the Sunrise*) Chicago and London)
- Capell, A. 1962 "Oceanic Linguistics Today" *Current Anthropology* 3-4
- Chikamori, M. (ed) 1975 "The Early Polynesian Settlement on Rennell Islands Protectorate" *Occasional Papers of Archaeology and Ethnology*, Keio University

- sity No. 1
近藤 昌 1983 「ノホホノ島ノ文化適應ノ考古学的過程」
『雑・史・祭』 東京
- Churchill, W. 1911 "The Polynesian Wanderings" Carnegie Inst. Washington, Pub. 134
- Dyen, I. 1965 "A Lexicostatistical Classification of the Austronesian Languages" *International Journal of American Linguistics* Memoir No. 19
- Elbert, S. H. 1953 "Internal Relationships of Polynesian Languages and Dialects" *Southwestern Journal of Anthropology* 6
- Elbert, S. 1967 "A Linguistic Assessment of the Historical Validity of some of the Rennellese and Belonese Oral Traditions" *Polynesian Culture History*, Hawaii
- Firth, R. 1931 "A Native Voyage to Rennell" *Oceania* 2
- Green, R. 1966 "Linguistic Subgrouping with in Polynesian: The Implication for prehistoric settlement." *Journal of the Polynesian Society* 75
- 1971 "Anuta's Position in the Subgrouping of the Polynesian Languages" *Journal of the Polynesian Society* 80
- Gutch, J. 1971 "Martyr of the Islands" London
- Howells, W. 1973 "The Pacific Islanders" London
- Levinson, M. et al. 1973 "The Settlement of Polynesia: A Computer Simulation" Canberra.
- Pawley, A. K. 1966 "Polynesian Language: A Subgrouping based on shared Innovations in Morphology" *Journal of the Polynesian Society* 75-1
- 1967 "The Relationship of Polynesian Outliers Languages" *Journal of the Polynesian Society* 76
- Simmons, R. T. et al. 1966 "A Blood Group Genetic Survey of Children of Bellona and Rennell Island, and Certain Northern New Hebridean Islands" *Archaeology and Physical Anthropology Oceania* 1-2
- Thilenius, G. 1902 "Ethnographische Ergebnisse aus Melanesien" *Abhandlungen der Kaiserlichen Leopoldinisch Carolinischen Deutschen Akademie der Naturforscher*, Noua Acta. Halle
- Vayda, A. P. 1959 "Polynesian Cultural Distribution in New Perspective" *American Anthropologist* 61
- Vayda, et al. 1963 "Island Cultures" Man's Place in the Island Ecosystem. Hawaii
- Ward, G. et al. 1973 "The Settlement of the Polynesian Outliers: A Computer Simulation" *Journal of the Polynesian Society* 82-4
- Woodford, C. M. 1907 "Notes on Rennell Island" *Man* 7